

ツリーズム
〈観光〉・タナトス
〈自殺〉・エロス
〈恋愛〉

——中谷孝雄「春の絵巻」に表象された〈京都〉——

渡 邊 浩 史

一、表象される都市

中谷孝雄の小説「春の絵巻」は、一九三四年四月に文芸雑誌「行動」に発表され、三七年七月、赤塚書房から同名の創作集に収録されている。中谷は三三年五月、「麒麟」に発表した小説「春」が川端康成によって高い評価を得て以来、新進作家としての地位を築きつつあった。⁽¹⁾「春の絵巻」はそんな中谷が世間に認められることになった佳品であるにも関わらず、研究レヴェルでの先行論は、中谷が京都の旧制三高の学生であったという事実のもと、彼の青春を語った自伝的小説という位置づけのみで評価・検討し、単独で論じることがほとんどしてこなかった。⁽²⁾そんななか、作家論的観点での評価ではあるものの、この小説テキストに描かれた京都の都市空間に着目した以下の

指摘は、「春の絵巻」の新たな断面を引き出そうとする我々の立場にとって、貴重な視座となるだろう。

「春の絵巻」は昭和九年四月、文芸雑誌「行動」に発表された。憧憬と不安、情熱と懷疑のいりまじった青春を描いた作品のひとつである。三高の学生を主人公としたこの作品は、作者自らの青春を語ったものとみていい。(中略)／慶流橋をわたると、朱塗りの大鳥居である。疎水の水がやわらかに光る。この橋から平安神宮の応天門まで、広々とした通りに緑の影が落ちる。岡崎公園。六勝寺の旧地に平安神宮の境内地の一部を加えた八万平方メートル余の“いいこの場”である。

昭和御大典を記念して作られた京都市美術館、大正天皇

の御成婚を記念して開園された動物園、公衆図書館として日本でも最初のものである府立図書館と、由緒のある建物がならぶ。さらに勸業館、公会堂、そして京都での音楽と演劇のメッカともいべき京都会館、国立近代美術館など、文化都市京都にふさわしい公園なのだ。いかににぎわっているように、⁽³⁾ 歓楽の地ではない。

作家の自伝的小説であると位置づけながらも、そこから「文化都市京都」の風景を引きだし、「いかににぎわっているように、⁽³⁾ 歓楽の地ではない」と、その都市テクストの役割を指摘するこの文章は、作家論的根拠の重要性から解放された研究領域に我々を誘引してくれる。ここで想起されるのは、「テクストとしての都市をメタテクストないしはサブテクストとしての文学作品と対応させて行く操作によって、実体概念としての作者を関係概念の括弧に括弧することを意味している」⁽⁴⁾と述べた前田愛の言だろう。小森陽一はこの前田の戦略を「実体として扱われてきたある時代の人間の自我を、都市空間とモノと身体と言葉の網の目の中で、重層的に決定されている関係性として捉える立場である」⁽⁵⁾と解説している。つまり、作家論的理解を中心化する動向からは見えてこない視点を、現象として「春の絵巻」に織り込まれた都市テクストの解説からメタテクストであ

る「春の絵巻」を考察していこうとする試みだ。ここで重要なのは、都市論的な手法の優位性を説くことではなく、「春の絵巻」が小説という形式を取っていることを改めて理解したうえで、単純に読解の枠組みを作家の伝記事項に還元することを避けなければならないということである。

本論は、こうした前田の視点を導入し、「春の絵巻」のなかで〈京都〉^{テクスト}がどのように表象されているのかを追求していくものである。そして、分析の過程で浮かび上がる〈京都〉に織り込まれた含意^{コンテクション}から、改めて「春の絵巻」を分析する新しい視座を確保することが、本論が目指すもう一つの目論見である。

二、〈期待の場〉^{トポス}

まずは「春の絵巻」の梗概を整理しておこう。以下に引用するのは『日本近代文学大事典』第二巻（講談社、一九七七年一月）でまとめられた本作のあらすじである。

三高の学生（と思われる）石田は友達二人と春の嵐山に遊んだ帰り、京極のレストランで知合った三人連れの娘の一人、民子に心をひかれる。翌日学校へ出て、昨日の嵐山で出会った同級生岡村の自殺を知らされ、「せつないまでの

感傷」に沈むが、より強く民子への想いがつのり、伝手を求めて民子と再会し、自己の心情を告白する、という筋。微妙に揺れる青年の心情のひだを、すなおに、しかし緻密にたどった心理的「絵巻」ともいえるべき短編。

「春の絵巻」は、三人の男子学生に若い三人の女性を配置し、彼／彼女らの恋愛物語を進行させていくなかに、男子学生の同級生の自殺というもう一つの物語を組み込み、青年の憧憬や苦悩を描いた〈青春絵巻〉の体裁をとっている。従来の研究史ではこの〈青春〉に着目し、「三高の学生（と思われる）」登場人物の「微妙に揺れる青年の心情のひだを、すなおに、しかし緻密にたどった」点から、読解コードを作家の実人生に還元していき、「作者自身の青春を語った作品」という解釈の一元化が進められてきた。⁽⁶⁾しかし、例えば作者が過去の体験をプレテクストにしたにせよ、そこには新たなテクスト生成に向かおうとする作者の苦闘の歴史が刻み込まれているはずだ。そして、そのような過程を経て世に送り出された物語を読解する読者には、様々な読み方をする権利が保障されているはずである。

この点に関して、以下に引用するYu・M・ロトマンの言説は、「芸術作品」を読解しようとする読者の読書行為の読解パターンを指摘したものであるとともに、作家論的根拠を中心化

する読みの問題系に対して、新たな観点での読解を要請したものであるといえるだろう。

読書に取りかかったり、劇場で映画や芝居の鑑賞に取りかかるうとするとき、読者なり観客は、自分に提示されるテキストがどのような体系のなかにコード化されているかをしまいまで知っているわけではないし、全然分かっていない場合もありうる。当然、彼はテキストのジャンル、様式、すなわち、テキストの知覚のために自分の意識のなかで活性化しておかねばならないある類型的な芸術コードについて最大限完全な概念を得ることに関心を持つのである。このことに関する情報を彼は主に、始まりのところで汲み取る。（中略）現代の物語りテキストにおけるコード化機能は、始まりに所属させられ、題・材的・「神話化」的機能は終りに属させられている。⁽⁷⁾

ここで我々は、「現代の物語りテキストにおけるコード化機能は、始まりに所属させられ、題・材的・「神話化」的機能は終りに属させられ」その「情報を彼は主に、始まりのところで汲み取る」とするロトマンの視点を重視することにしよう。ロトマンは「文学作品の枠組は、始めと終りという二つの要

素からなつて」おり、そこでテキストの「創造（作り上げること）」という行為は、始^{ナチャイロ}めの行為である」と定義づける。つまり、文学テキストの「枠組」としての「始^{ナチャイロ}め」を解説／創造していけば、その文学テキストの「コード化機能」を引きだすことができるはずなのである。

このようなロトマンの指摘を理解したうえで、我々は「春の絵巻」冒頭の第一段落を読み進めてみよう。

新しい学年が始まつて最初の日曜日のことだつた。石田は昼すぎから室町の下宿を出て嵐山へ花見に出かけた。花を見たいといふ気持はそれ程でもなかつたが、休暇中を故郷の田舎に帰省してゐて、やり場のない鬱^{うつ}をその体^{からだ}に感じてゐた彼は、群衆の出盛る賑かな場所が怪しく懐しかつた。四條大宮の嵐山電車の起点までゆくと、彼はクラスの丹羽と保科とに出逢つた。丹羽も保科もやはり石田と同じやうに、何かしら得態の知れない精気に憑かれたやうな顔をしてゐた。三人は其処で一緒になつて、怪我人でも出さうなほど押合つてゐる群衆のなかに割込んで、遮二無二電車に乗つた。ぎつしりと身動きも出来ないまでに詰込んだ乗客は、駅々での発着ごとにその反動を喰つて激しく前後にもみ合つた。女たちはその度に魂消るやうな悲鳴をあげ

た。石田たちにとつては、この息詰まるやうな車内の混乱と動揺とが快よかつた。彼等はずと強い手応へを求めるやうな気持で、電車の発着ごとに期待の瞳を輝かした。

（傍線引用者、以下同様）

この引用箇所から即座に読み取れる「情報」は、主人公である石田を中心とした三人の男子学生が、「新しい学年が始まつて最初の日曜日」に「嵐山へ花見に出かけ」たということである。先行論では、この三人の男子学生の主人公・石田と作家・中谷孝雄を二重写^{オバダラフ}しにし、実体的な作家との距離の測定の方に興味・関心が移っていく。そして、そこから得た情報から「春の絵巻」を読解していくわけであるが、ロトマンの言説を重視し、作家論的情報の重要性を判断停止^{ハジメト}する我々の立場で分析していけば、ここからは、別の「情報」を引きだすことができる。

石田を中心とする三人は、確かに「嵐山へ花見に出かけ」る。だが、引用箇所にもあるやうに、何も三人は「花を見たい」といふ気持^{キモチ}が強く出て出かけるのではない。石田は「やり場のない鬱をその体^{からだ}に感じ」ており、丹羽や保科も「得体の知れない精気に憑かれたやうな顔をしてゐる。そんな「彼等」が「嵐山へ花見に出かけた」最も大きな理由は、「群衆の出盛る賑

かな場所」へ「強い手応へを求め」ていたことだ。つまり、「春の絵巻」において「嵐山」という場所は、「花見」をする場所という一般的な記号^{シニファイ}内容として存在しているのではなく、「群衆の出盛る賑かな場所」へ「強い手応へを求める」三人の男子学生の〈期待の場^{トマス}〉〉として設定されているのである。ここで確認しておかなければならないのは、石田等が嵐山というトポスに「強い手応へを求め」ていることが、物語を読み解くコードの一つとして配置されていることだ。

以上述べてきた基本的な問題意識を踏まえたうえで、次節では本作における京都Ⅱ嵐山の記号^{シニファイ}内容について考察していきたい。まずは、石田たちが嵐山に到着した場面から見ていくことにしよう。

三、「擬似イベント」

「四條大宮の嵐山電車」から出発し、終点に降り立った三人の視界に拡がっていたのは次のような景色であった。

渡月橋の袂まで出ると、俄かにバツと峡谷の展望がひらけて、殷んな春のどよもしが彼等の体に押寄せてきた。三人は思はずその光景に打たれて立停つた。群衆の華やかな流

れは、ひきも切らず狭い橋の上を対岸にまで続いてゐた。

水嵩を増した急流がその下で白い瀬頭を乱してゐた。花は今向かひの崖の緑樹のなかに狂ほしいまでに咲揃つて、その梢は妖しく緑樹の枝と戯れながら、日光と風とのために複雑な陰翳の変化を見せてゐた。花と緑樹に覆はれた崖の裾には、青々と淵がよどんで、幾艘とない花見船がその影を踊らしてゐた。淵に沿つて、崖裾には細い一本の路が通じてゐて、人々は其処にも蟻のやうな行列をつくつて動いてゐた。酒に弾んだ唄声や賑かな囃子の音が、水からも陸からも湧上つて、潤はつた峡谷の空にたちのぼつてゐた。

ここに引用したテキストが興味深いのは、描かれている「嵐山」の景観が、当時の嵐山の地形を再現した観光地図と精確に重なり合うことだ。^⑧そして、引用に組み込まれた風景描写に注目してみると、当時の観光案内図で盛んに用いられていた書き方と、非常に類似した手法で描き出されていることに気付かされる。

夢みるやうにたちこめた薄霞^{うすがすみ}の底から、青い水は溪間^{たにのま}一ぱいに悠々と流れ下つてくる。洛北^{らくほく}の晩春^{ばんしゅん}を溶^といて流^{なが}して、樹深い山^{こぶかやま}の翠^{みどり}りをうつした大堰川^{おほゐがは}は、滑らかによど

み、潤^{うる}膩^じとして湛^たえ、その盛り上^あつた水^{みづ}の肌^かに、そこはかとなく散^ちり浮^うく花^{はな}の姿^{すがた}までが、ゆく春^{はる}を惜^{おし}む風情^{ふうせい}である。そしてまもなく衣^{ころも}がへの颯^{さつ}爽^{そう}とした天地^{てんち}となり、まぶしい新緑^{しんりく}の光^ひりに包^{つつ}まれて、嵐山^{らんざん}の初夏^{しゅご}がくる。河鹿^{かじか}が鳴^なき、躑^つ躑^つは燃^もえ、舟^{ふね}は下^{くだ}り、朝靄^{あさぐさ}の眺^{なが}めも一入^{ひとしほ}美しい。⁽⁹⁾ (原文は総ルビ)

ここで留意したいのは、このような描写が本作に及ぼす効果Ⅱ影響についてである。「春の絵巻」を読み進めていくと、このような観光地の光景を思わせる描写のなかで、若さ溢れる男子学生の青春がまざまざと描き出されていく。例えば、嵐山駅から降り立った三人のうち保科は「春ぢやのう！」と「感に堪えたやうな声をあげ」る。その後、丹羽と「組打ちを始め」るのだが、いよいよ「組打ちは次第に真剣なものになって」くると、それまで「笑ひながらその格闘をながめてゐた」石田は「怪しく狂暴な力にかられて、毛物^{マモノ}のやうな叫声^{きせう}をあげながら、矢庭に二人の体^みにぶつかつてい」く。その「組打ち」が終わると、「寮歌をうたひながら」「対岸の花を見」に行こうとする……。

こうした学生たちの青春の一頁を切り取ったような一連の出来事を読み進めていく読者は、まだ見ぬ／再度見たい「春の嵐

山^{さん}」に対する強い憧憬や期待を膨らませたに違いない。テキストに描かれる嵐山のエクリチュールから想像／創造された〈期待の場^{トポス}〉に自身と作中人物とを重ね合わせ、彼らと一緒に言語都市の「嵐山」を歩行Ⅱ移動することを楽しんだであろう。また、往訪した経験を持つ読者は過去の体験と照らし合わせることによって、彼らが歩行Ⅱ移動する言語都市の「嵐山」と自身が歩んだ現実の嵐山とを二重^{オーバーラップ}写しさせ、虚／実^{ボーダー}の域^きを超えた青春絵巻を形成したに違いない。このような読者の視点は、〈嵐山〉を読解コードにして内包された様々なメッセージを喚起させていく。つまり、小説内で歩行Ⅱ移動する人物たちが「嵐山^{レニフィアン}」を「強い手応へを求め」る〈期待の場〉として表象していくように、小説を読み進めていく読者の視線にも〈嵐山Ⅱ期待の場〉が再現Ⅱ表象されていくのである。そして、そこから導出されるのは読者が抱く〈旅〉に対するまなざしⅡ〈観光^{グレイズム}光〉への様々な欲望であろう。

本節では、「春と絵巻」に描かれた「嵐山」について〈観光^{グレイズム}光〉の視点から見直してみようと思う。ここで本論が考える〈観光^{グレイズム}光〉のシステムについて、「観光社会学」という観点で分析する須藤廣、遠藤英樹の仕事を参照しておこう。須藤はD・J・ブーアスティンがメディアによって製造される「出来事^{イベント}」を「擬似イベント⁽¹⁰⁾」と定義した観点を導入し、「観光」を分析する

視座として取り入れることを第一に考える。

観光体験の解釈の「フレーム」が、現実の旅で「直接」体験され確立されるのではなく（あるいは他者の旅行経験の対面的な伝聞ではなく）、観光に出發する前に、メディアや旅行代理店によってすでにつくられており、観光客は旅行経験をそのイメージの「システム」の枠内で、前もって与えられたイメージのフィルターを通して、形作るようになったという⁽¹¹⁾ことである。

ブーアスティンが提示した「擬似イベント」は「観光」を「メディアを通して、あらかじめ「仕組みられた」もの」として思考することを我々に要請する。そして、ブーアスティンが「われわれは現実によってイメージを確かめるのではなく、イメージによって現実を確かめるために旅行する⁽¹²⁾」と言及したように、「観光」という行為は、メディアによって内面化／構築された観光地のイメージを再度確認するために現地を訪れるものであると規定するのだ。このようなブーアスティンの言説を重視する我々の立場で考えていけば、作家論的枠組みで解釈されてきた「春の絵巻」に読者論的な視点を新たに見出すことが可能となる。「春の絵巻」に描かれている〈青春〉は、確かに作

家の自伝を喚起しやすい装置となっている。だが、テキストを読み進めていく視点を作中人物の視線から現出する背景Ⅱ都市にスライドさせていけば、そこから見出せるのは作中人物と（本作を読み進めていく）同時代／現代の読者の内面に生起する〈観光〉への欲望である⁽¹³⁾。

再び、前述のロトマンの言説を振り返ってみよう。

現代の物語りテキストにおけるコード化機能は、始まりに所属させられ、題材・「神話化」的機能は終りに属させられている⁽¹⁴⁾。

「春の絵巻」冒頭部で石田の視線に生起したのは「強い手応へを求める」群衆の出盛る賑かな場所Ⅱ〈嵐山〉であった。ロトマンの言説を重視すれば、ここに「物語りテキストにおけるコード化機能」が備わっていることが確認できる。さらに、読者の視線に生起するのも石田が思い描く〈嵐山〉に関する情報である。また、読者に担保された情報はそのまま「観光」の欲望にアクセスされていく。そして、作中人物と共に言語都市の「嵐山」を歩行Ⅱ移動していくのだ。つまり、「春の絵巻」に描き出されるエクリチュールによって「観光」の欲望を惹起された読者の見方でテキストを読み進めていけば、そこに描き

出される背景Ⅱ都市は、同時代／現代の読者を京都（Ⅱ嵐山）へ誘惑する装置として機能していたと考えることが可能となるのである。さながら、「春の絵巻」は京都の有名な観光地の一つ、嵐山に関する観光情報誌という「擬似イベント」の役割を担わされたテキストであったといえるだろう。

実際、石田たち三人が利用する「嵐山電車」に関して、当時嵐山保勝会が発行していたガイドブックである『観光の嵐山』⁽¹⁵⁾には、「嵐山の観桜、観楓」「洛西名所廻り」「高雄の紅葉狩」等に「一番御便利な嵐山電車 八分乃至四分毎発車」「嵐山四條大宮 二十分 片道 十四銭」と宣伝文句が付されており、嵐山までの交通手段として、「嵐山電車」が非常に便利であることを窺わせる。そして、この情報は「四條大宮の嵐山電車の起点」に向かい、電車に乗り込む石田たちの行動を押さえることにより、実際に観光しよう（Ⅱ追体験しよう）とする読者にとっての「擬似イベント」の役割を果たしたであろう。また、「彼等の立つてある直ぐ向ひの崖には、川に臨んで温泉宿が建つてゐた。其処の部屋は川に向つて開放つてあるので、浴客たちの騒いでゐる姿が手にとるやうに此方から見られた」という語り手の説明も、「嵐山の麓、保津川の溪流に臨める温泉場にして、天然湧出の源泉は無色透明、ラヂウムを多量に含み諸病に卓効あり」と宣伝する「嵐山温泉 嵐峡館」の当時のパ

ンフレットと同様であり、この語り手の言説自体が「観光宿」を選択する「擬似イベント」として機能する。さらに興味深いのは、作中人物である石田たちの視点にもこのような「観光Ⅱ擬似イベント」の見方が備わっていたことである。

・石田は昼すぎから室町の下宿を出て嵐山へ花見に出かけた。花を見たいといふ気持はそれ程でもなかったが、休暇中を故郷の田舎に帰省してゐて、やり場のない鬱^{うつ}をその体にかけてゐた彼は、群衆の出盛る賑かな場所が怪しく懐しかった。

・（渡月橋の袂から離れて）そのまゝ、川に沿つて逆上つていった。対岸の花を見るためには、こちらの丘に登るのが当然だったが、何故か人々はみんな対ひの花の山に分けいて、こちらへくる者は比較的少なかつた。

三人の学生は「嵐山」Ⅱ「花見」群衆の出盛る賑かな場所」という記号化された情報を持っていた。さらに、渡月橋から「逆上つてい」くことが「対岸の花を見るために」「当然」であることを知識として把握している。語り手の言説は、これらの情報を三人の学生が何らかの情報^{けいほう}の体系を利用してあらかじめ用意していたことを我々に伝えている。つまり、石田たちが歩

行Ⅱ移動する嵐山の背景Ⅱ都市は、彼らがあらかじめ用意していた情報Ⅱ「擬似イベント」を追体験していく作業であり、あらかじめ知り得ていた情報をもとにガイドブックなしに嵐山の街を領略する彼らの確かな足取りは、同時にその言語都市を歩行Ⅱ移動していた我々読者の「擬似イベント」となり、言語都市空間の〈嵐山〉を領略していくのだ。

四、〈憧憬〉／〈不安〉——表象される〈自殺〉

読者論的な観点を導入・分析した前節から〈観光小説〉としての枠組みを引き出したわけだが、「春の絵巻」を読んでいく読者の視線には、学生を主体とする〈青春絵巻〉に必要な不可欠ともいえる要素、〈自殺〉／〈恋愛〉の文字が飛び込んでくる。この二つの問題系に関しても先行論では〈青春〉を繰り広げる学生の心情／心境にスライドさせていき、読解の枠組みとして作家の実人生が召喚されることになるわけだが、テキストに織り込まれる〈自殺〉に関しては、安藤宏が同時代文脈との関係性を鋭く指摘した斬新な論考を発表していた。安藤が論究したのは太宰治「道化の華」（日本浪曼派、一九三五年五月）と発表時のコンテキストⅡ「自殺の季節」との相関性についてのものであるが、「春の絵巻」（「行動」、一九三四年四月）と同時期

の発表であるので、抱える問題系には幾つかの共通項が見出せる。

太宰治がたびたび繰り返していた自殺未遂は、これまできわめて特異な個人の「資質」として取り扱われることが多かったけれども、実は心中事件のあった昭和五年から、これを題材にした『道化の華』の発表される昭和十年にかけての数年間は、日本の近・現代史上、他に例を見ぬほどに若い知識人たちの自殺・心中が「流行」していた時代でもあり、〈中略〉／一方、純文学の領域においては、事態はこれら（エロ・グロ・ナンセンス）の世相をうけた、モダニズム的な風俗ルポルタージュ）とはおよそ異なる受け止められ方をしていった。端的に言えば、自殺・心中は多くの場合、若き知識人達の階級的相克の象徴として描かれることを最大の特徴とし、まさしくこうした一義的な解釈のあり方にこそ、当時の純文学の閉塞状況そのものが象徴されていたものと考えられるのである。（中略）／このほかにもたとえば長谷川如是閑が、近年の〈青年自殺の高率の理由〉の一つに〈知識階級〉の〈階級的没落〉をあげている（『自殺と道徳的性格』、昭9・10「中央公論」）事例などからもうかがえるように、こうした観点は、決して文壇の片隅に棲息

していた特殊な解釈であつたわけではない。⁽¹⁷⁾

安藤の指摘は、「春の絵巻」で語られていく「岡村の自殺」の問題系と見事なまでにリンクする。ここで岡村という人物について簡単に整理しておこう。岡村は石田と同クラスの年齢が「三つばかり上」の友人で、性格は内向的、若干、哲学的な思想を持った人物として三人と偶然嵐山で遭遇するという役割を担っている。この岡村と三人の学生は嵐山で雑談に興じ、三人が嵐山を離れる際、一人で「大悲閣」に登っていくところで別れるのであるが、翌日、彼の自殺がクラス中に知らされていく。そこで「岡村の自殺」をめぐる議論は以下のような展開を見せる。

みんなは口々に、岡村の身寄りのない境遇だとか、彼の独学のことだとか、その他現在まで彼が家庭教師として寄寓してゐた家のことだとか、それ等のことに就いて各自の知識と意見を述べたてた。ある者は、岡村の死を自我の拡充のための発展的自殺だなどと言ひ、他の者は、恐らく失恋の結果だらうといった。突飛なのになると、彼の死を彼の出世根性からきた悩みのためであるなどと結論した。
(中略) だが、誰一人岡村の真の死因にふれるやうなこと

をいふことの出来るものはあつた。彼等は若々しい好奇心から熱心に喋つたり議論をしてゐた。そして、次第に岡村の姿が巨大な及びがたい英雄の位地^マにまで押上げられていつた。
(波線引用者、以下同様)

「岡村の自殺」をめぐる級友たちの議論は、岡村の死を「悲しむ」というレヴェルから、より高次の「議論の題材」へとシフトしていく。しかし、「誰一人岡村の真の死因にふれるやうなことをいふことの出来るものはあつた」という語り手の視点から、議論の先にある〈真因〉への到達をうやむやにする。ここで留意して欲しいのは、「岡村の真の死因」について語り手は確信的に語っていないことだ。だが、そこで担保された〈真因〉への到達は、石田が「昨日の岡村の言葉」を回顧する言説(読解コード)によつて解き明かされることを我々は確認する。

石田はふと昨日の岡村の言葉を思ひだしてほつと吐息をついた。(僕は今日ほどの世を美しいと思つたことはないよ!) そんな目で見ると、実に今校庭の風景は美しかった。校友の姿も生々と際立つて美しく、桜の花にも嘗てみなかったほどの風情が感じられた。石田は気の遠くなるや

うな恍惚を感じた。そして、その風景から湧きあがるもや／＼とした思慕のなかに、彼は美しい死をさへ憧憬した。

(中略) 若しかすると、岡村は今日まで全く春を知らなかつた男なのではないかと思はれた。そして、昨日初めて春の美しさに打たれ、その激しい感動が、彼の過去を一層堪え難いものに思はせたのであるかもしれない。光を見た瞬間の驚きに恍惚とした刹那、彼はその過去の闇に敗けて仕舞つたのであつた。

石田と共に「昨日」の岡村を観察できた我々は、語り手が級友たちに「岡村の真の死因」を究明できないことを石田の言説によって瞬時に理解していく。ここで重要なことは、物語を進行する語り手が語らない「岡村の真の死因」を、「初めて春の美しさに打たれ」た「堪へ難い」「過去の闇に敗け」た青年が「美しい死をさへ憧憬」する心理／心境と規定する石田の言説に委ねられることである。そして、さらに留意すべきは、この議論が当時の「青白きインテリ」の苦悩として自己の存在意義を機械的に否定してゆく⁽¹⁸⁾言説の網の目に自然と取り込まれていくことであろう。

また、ここで着目して欲しいのは、岡村が自殺した場所が嵐山という〈観光地〉であるという事実だ。精神神経科医である

大原健士郎は〈観光〉／〈自殺〉の相関関係について、「青年層」というカテゴリーで特定した研究結果を以下のように述べている。

青年層の自殺は各研究分野にわたって多彩で、種々の内容がまざりあっている。この年齢層では、心理学的にいても独立と自由を獲得し、人間としての誇りを身に付けようとする時期である。しかし、それとともに彼らは大きな孤独とあつれきを体験する。彼らは人格の完成への途上において、環境的な影響をうけることも多くなるし、生物学的にいても、自殺と関係の深いうつ病をはじめとして、精神分裂病、易感性関係妄想、精神病質などの好発時期でもある。(中略) 青年層に遺書を残す自殺者が多いことや人目につき易い場所を選ぶ者が多いこと、あるいはまた、自殺名所といわれる日光、熱海、鎌倉、京都などの観光地の自殺が、大多数青年層によって占められることなどから、青年独特のムードを求める気持が現れているとみてよい。⁽¹⁹⁾

精神神経科医である大原が環境的・心理学的な視点で分析した研究成果を「春の絵巻」という文学テクストの解説に直接用

いることの賛否はともかく、「観光地の自殺が、大多数青年層によって占められる」理由を「青年独特のムードを求める気持」にあると結論づけている点は見逃せない。〈観光〉と〈自殺〉は奇妙に接続する関係性にあったのだ。

「岡村の自殺」は「自殺の季節」を生きたる〈青年〉が抱える「憧憬と不安」を喚起させる大きな問題系であった。「やり場のない鬱をその体を感じ」「得体の知れない精気に憑かれた」〈青年〉たちは、「強い手応へを求め」ていく。だが、そんな「刹那」の〈憧憬〉は「美しい死」までをも招来する危険性と常に隣り合わせの状態にあったのだ。そこには「堪へ難い」「過去」

「不安」の要素が隠見している。その舞台装置として〈嵐山〉という場所が選択されたのも「青年独特のムードを求める気持」と無関係ではないだろう。ともあれ、「春の絵巻」はそんな同時代の〈青年〉に読者が常に抱えていた〈憧憬〉／〈不安〉を喚起させるテキストでもあったと言えそうである。

五、〈憧憬〉／〈不安〉——〈恋愛〉の志向

だが、〈青年〉が抱えていた〈憧憬〉／〈不安〉は〈自殺〉／〈死〉へ向かう欲動だけではない。そこには真逆のベクトルを志向する〈恋愛〉／〈生〉の欲動があった。

岡村の死に関する議論は、次の休みの時間になつてもなか／＼衰へなかつた。石田は何か被告のやうな引けめを感じて、皆の間を逃れて校庭の芝生へ出ていった。そして、ぼんやりと春の陽をうけて坐つてゐると、彼は何時の間に、か岡村のことは忘れて、夢中で民子の姿を追つてゐるのだつた。捕へ難い彼女の影が、妖しく彼の眼前に漂つて、昨夜の不本意な別れが惜しまれてならなかつた。

物語を「岡村の自殺」以前に戻そう。嵐山で岡村と別れた三人は京極のレストランで「三人連れの娘たちと一つの卓に坐り、「一緒に丸山へ夜桜を見にゆく約束」が成立する。石田は民子という娘に「言ひやうのない美しさを感じ」「空想のなかに充分準備されてゐた恋愛が、急に生々と動きだ」す衝動に突き動かされ、様々なアクションを試みるが、民子の気を引くことができない。そんな中、二人で帰路に向かうチャンスを迎えるが、ここでも想いを伝えることができず、翌日の「岡村の自殺」を知ることになる――。

「――岡村の死が電話で寮へ知らされたのは昨夜の九時頃だつた」という語り手の指摘を踏まえれば、石田たちが「三人連れの娘たちと」「丸山へ夜桜を見に」行った時間帯には岡村の

自殺は完了していた。――岡村が抱えていた〈憧憬〉／〈不安〉は「美しい死」を志向する。だが、石田たちが抱えていた〈憧憬〉／〈不安〉は、「娘たち」との〈恋愛〉を求めていくのだ。そして、「岡村の自殺」を契機として、その欲動／欲望は更に膨れ上がっていくことになる。

石田は是が非でも、もう一度民子に逢はねばならないと思つて、その方法を様様に思ひ巡らしてゐた。

こうした石田の〈恋愛〉は、とうとう押さえきれないものとなり、既に「三人連れの娘たち」の一人である葉子との〈恋愛〉を進行させていた丹羽から詳しい事情を聞くことになる。

石田は急に眼界のひらけたやうな喜びを感じて、いきなり丹羽の体に抱きついていつた。

「頼むよ、ほんとに頼むよ！」

彼は激しく丹羽の体をゆすぶりながら叫んだ。

石田は民子との繋がりが保てそうになったことに「眼界のひらけたやうな喜びを感じ」る。そして、いよいよ民子と会える機会を得た石田の脳裏に浮かんできたのは、「死んだ岡村の

姿」であった。

石田は深い感動に打たれながら、生といふものを無上に美しく感じた。その時、石田は不意に全くだし抜けに突然死んだ岡村の姿を思ひだした。嵐峽の崖に立つてゐた彼の姿が、何故かへんに今の自分の姿に似てゐるやうに思はれてくるのだつた。暗いトンネルの口がありありと彼の前に見えてきた。彼はひどく苛々した。何か体ごと投出すやうな喜びを彼は激しく求めた。

真逆のベクトルを志向した二人の〈憧憬〉／〈不安〉は、この瞬間に同じ位相を見せる。そして、石田はさらに、岡村との共通性を民子との待ち合わせのなかで感じていく。

何かしら、岡村の死が、彼の今求めている愛といふものにひどく近いものに思はれた。それは、どちらも共に完全な生を求める気持につながつてゐた。石田はそんなことを考へて、ひとりで昂奮してゐた。間もなく、民子の姿が対ふの道に現れた。

石田と岡村が抱えていた〈憧憬〉／〈不安〉は「共に完全な

生を求める気持につながつてゐた。だが、その視線が見つめる世界は正反対のものである。石田が「美しく感じた」「生」
 Ⅱ「求めてゐる愛」は民子への〈恋愛〉感情であつた。それに
 対し、岡村は「初めて春の美しさ」Ⅱ「生」に「打たれ、その
 激しい感動が」「美しい死」を招来することになる。詳述すれば、「激し」すぎる「感動」に堪えきれなくなった〈青年〉の
 〈安らぎⅡ救い〉を求める精神状況がそこにはあつた。このよ
 うな二人の心理的な枠組みは、S・フロイトが一九二〇年に
 『快感原則の彼岸』で分析した二元論的枠組みであるエロス／
 タナトスという欲動論で説明していくことを可能にする。

エロスが快というエクスタシスを目指し、いつてみれば母
 なるものとのプロティノスの合一に向かうように、タナト
 スの方も無機物の持つ安定へと以前の状態に回帰する傾向
 を持つのである。つまるところこの両者は取り返し難く失
 われた対象をめぐり、それを呼び戻し、原人間へ戻ろうと
 する同じ欲動の二側面を表わしていると考ええることもでき
 るわけである。⁽²⁰⁾

岡村に生じた死の欲動は「激しい感動」から反転すること
 によつてもたらされた「非常に思弁的な性格の強い欲動概念」⁽²¹⁾

であつたといえるだろう。対する石田は、民子への〈恋愛〉Ⅱ
 「快というエクスタシス」へと突き進んでいく典型的な
 生の欲動であつた。だが、この二つの欲動は「原人間へ戻ろう
 とする同じ欲動の二側面」という説明にもあるように、二項対
 立的な単純な図式では把握できない。思想家・翻訳家である中
 山元は、フロイトの著作を翻訳していく過程で、このような二
 元論的思考——エロス／タナトスの概念——の役割をJ・ラカ
 ンの精神分析理論を援用し、死の欲動の側から次のように分析
 する。

人間には自己を破壊し、他者を攻撃するような死の欲動が
 存在すると主張するようになった。この死の欲動は、エロ
 スという性の欲動の対立物として考えられているが、人間
 が他者とのエロスのな関係を構築するためにはこのような
 否定性の道を通過する必要があることを考えると、この二
 つの概念は必ずしも対立するものではなくなるのである。⁽²²⁾

石田が「嵐峽の崖に立つてゐた」岡村を「今の自分の姿に」
 重ね合わせたのは、同じ「生」を「求めてゐ」た者同志の関係
 性に根付くものであるが、岡村はそこで「構築する」べき「エ
 ロスのな関係」を「死の欲動」に接続させてしまう。そんな岡

村との切り離せない関係性は、石田の中で民子と出逢い、「恋人」の関係になることで解消されていく。

二人の恋人たちは、それからゆつくりと再び最初の橋の方へ歩いて行つた。石田は不幸な岡村のことを話した。彼は次第に昂奮してきた。

「死ぬほど青春のないことを悲しむのも、やつぱり青春の悩みなんでせうね……」

彼がそんな風な感想でその話を終るとそれまで黙つて彼の言葉をきいてゐた民子が、急に生真面目な表情で彼の顔を見つめた。

「でも、死んぢやつまりませんわ」

民子にはこりとも笑はなかつた。石田はその直截な民子の言葉にへんに感動した。死んぢやつまらないと彼も本気で思つた。

石田はここで岡村の死の欲動から完全に解放される。そして実は、この民子の言葉に表徴されていたのも「青年」をめぐる当時の自殺言説から見出すことができるのだ。

たとえば「中央公論」昭和七年九月号の『血迷へる世相』

と題する「自殺」小特集に『自殺に就いて』『生きがひある時代』を寄せた里見弴、林房雄の論調などからも明らかにのだが、自殺・心中をなげかわしき世相として慨嘆し、自らの向日的決意を吐露してみせるという、いささか樂觀的な傾向が支配的であつたことは疑えないからである。⁽²³⁾

「春の絵巻」は「自殺」をめぐる当時の「言説」に「人びとのまなざしや知覚や思考の様式といった社会性の場を定める営み」⁽²⁴⁾を外部から導入し、内部で「青年」たちに問いかけていく形式を取り入れた。そこには自殺言説の網の目のなかで生きた当時の読者の関心を喚起させる狙いもあつただろう。そのような「時代の要請」を織り込んだテクストは、石田の「生」が岡村の「死」を乗り越えていく形で一応の結論を得ることができた。同時代の「青年」に読者が葛藤していた「死」に対する「憧憬」／「不安」は、「死んぢやつまりませんわ」という民子の言葉によって脱却する。

京都を舞台にした「春の絵巻」は「観光」／「自殺」／「恋愛」をめぐる物語を紡いでいた。「期待の場」として表象された「嵐山」を「観光」してきた読者は、「生」／「死」の議論に突き動かされる「青年」の心理／心境を共有するとともに、着地点として「生」の「美」へと誘われていくのである。つ

まり、「春の絵巻」に導出された「生といふものを無上に美しく感じた」というエクリチュールは、^{エロス}〈生〉の優位性を志向するテキスト自体の要請であつたといえるのだ。

注

- (1) 川端康成「文芸時評 新人の作品」(『新潮』、一九三三年六月)
- (2) 『京都の文学地図』(文芸春秋、一九六八年一月)、一見幸次「春の絵巻」 絢爛たる青春の譜」(『芸術三重』 第一五号、一九七七年三月)、駒敏郎編『文学とその舞台』(講談社、一九八四年六月)、河野仁昭『京都文学紀行』(京都新聞社、一九九六年二月)等を参照。
- (3) 『京都の文学地図』(文芸春秋、一九六八年一月)
- (4) 前田愛「あとがき」(『都市空間のなかの文学』ちくま学術文庫、一九九二年八月)
- (5) 小森陽一『『都市空間のなかの文学』解説』(『都市空間のなかの文学』ちくま学術文庫、一九九二年八月)
- (6) 注(2)
- (7) Yu・M・ロトマン／磯谷孝訳『文学理論と構造主義 テキストへの記号論的アプローチ』(勁草書房、一九七八年二月)
- (8) 『嵐山名所図絵 附保津川くだり』(観光社、一九三〇年三月)の「嵐山・愛宕、保津川下り御案内」に描かれている絵図が特に当時の嵐山を精密に復元している。「春の絵巻」に描かれた嵐山の景観(本論で引用していない箇所も含め)とこの地形図とを参照すると、地形の様子や位置関係などがほぼ正確に描かれていることがわかる。

(9) 前掲書。

- (10) D・J・ブーアスティン／星野郁美・後藤和彦訳『幻影の時代 マスコミが製造する事実』(創元新社、一九六四年一月)。ちなみに、後にこの「擬似イベント」という考え方に關して、徹底的に批判していくのがD・マッカネルである。マッカネルはどの観光客にも本物志向があり、この志向が「聖なるものに対する人間の普遍的な関心の現代版なのである」と論じていく。本論ではこの思考を直接取り入れることはしないが、「観光」を考えていくうえでの知の枠組みとしては重要な議論であろう。詳しくは、J・アーリ／加太宏邦訳『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』(法政大学出版局、一九九五年二月)を参照。

- (11) 須藤廣・遠藤英樹『観光社会学 ツーリズム研究の冒険的試み』(明石書店、二〇〇五年四月)

- (12) 注(10) ブーアスティン 前掲書。

- (13) この欲望に關して、注(10)に挙げたJ・アーリ『観光のまなざし』のなかで次のように指摘している。

「いろいろな場がまなざしを向けるところとして選ばれるが、選ばれる理由は、とくに夢想とか空想を通して、自分が習慣的に取り囲まれているものとは異なった尺度あるいは異なった意味を伴うようなものへの強烈な楽しみの期待なのである。このような期待は映画とかテレビとか文学とか雑誌とかレコードやビデオなどの非観光的な活動によって作り上げられ支えられているが、これこそこのまなざし(＝観光のまなざし)を作り強化しているものである」(一) 内は論者。

- (14) ロトマン 前掲書。

- (15) 小松美一郎編『観光の嵐山』(嵐山保勝会、一九三六年八月)

- (16) 前掲書。
- (17) 安藤宏「自殺の季節——太宰治『道化の華』論」(『自意識の昭和文学』至文堂、一九九四年三月)
- (18) 前掲書。
- (19) 大原健士郎『日本の自殺——孤独と不安の解明——』(誠信書房、一九六五年四月)
- (20) 福原泰平「フロイトの思想」(今村仁司編『現代思想を読む事典』講談社、一九八八年一〇月) なお、これ以降の分析において、J・ラプランシュ、J・B・ポンタリス／村上仁監訳『精神分析用語辞典』(みすず書房、一九七七年五月)、S・フロイト／中山元編訳『エロス論集』(ちくま学芸文庫、一九九七年五月) からは、非常に多くの教示を得ている。
- (21) S・フロイト／中山元編訳『エロス論集』(ちくま学芸文庫、一九九七年五月)
- (22) 前掲書。
- (23) 注(17) 安藤 前掲書
- (24) 内田隆三『探偵小説の社会学』(岩波書店、二〇〇一年一月)

付記 「春の絵巻」本文の引用は全て初出のままである。また、引用に際しては、適宜旧字を新字に改めた。

(ワタナベ ヒロフミ 嘱託研究員)